

〈研究ノート〉

ポエジーは現実はどう関われるのか

バンジャマン・フォンダーヌの詩と哲学をめぐる研究ノート

伊藤 琢麻

0. はじめに

1930年代が、危機の時代であったことは疑いようのないことだろう。ファシズムの台頭、スペイン内戦、そして第二次世界大戦へとつながっていく政治的・社会的な危機、ポール・ヴァレリーが述べた「精神の危機」、それからエトムント・フッサールが述べた生と文化と学問の危機などはその例である。これらの危機が、作家たちにとって、それまで信じられてきた価値の転覆を目指すきっかけのひとつとなったのはおそらく間違いない。事実、さまざまな作家たちが新しい思想を生み出しながら、この危殆に瀕する現実に向かい合おうと努力していた。それは、一度目の大戦が二十世紀を代表する文学・芸術運動であるダダやシュルレアリスムを生んだのと似ている。

ルーマニア生まれの哲学者、詩人であるバンジャマン・フォンダーヌ (Benjamin Fondane, 1898-1944) も、そのような作家のうちのひとりだった。哲学書、詩作品だけでなく、シナリオや映画まで残したフォンダーヌは、その幅広い活動を通じて多数の同時代作家たちと交流した。しかしながら、この人物が日本で知られているとは言い難い。たとえば、同じルーマニア出身のフランス語作家であるトリスタン・ツァラ、エミール・シオラン、ウジェーヌ・イヨネスコ、ゲラシム・ルカらと比べてみると、フォンダーヌの名前を目にする機会はずっと少ない。

そういうわけで本研究ノートでは、バンジャマン・フォンダーヌを日本語読者に紹介することを目的とする。まずフォンダーヌという人物について、伝記的事実を中心に紹介する。その際、これまで日本語で紹介されることの少なかった、彼と同時代の

哲学者との交流を中心に扱う。ついで、特に2000年以降の先行研究を整理しつつ、これまでフォンダーヌがどのように研究されてきたのかを確認する。またここでは、フォンダーヌを日本語で紹介してきた文章についても振り返ってみたい。最後に、代表作のひとつ『偽美学論』（1938年）での議論を中心に、ポエジーと現実の関係性をめぐる彼の考えについて簡単に取り上げたい。

1. バンジャマン・フォンダーヌという人物について

まずは、バンジャマン・フォンダーヌという詩人・哲学者の伝記的事実を振り返ってみよう¹。彼の活動や交友関係、そして著作を整理することで、この人物の輪郭を浮かび上がらせることができるはずだ。

フォンダーヌは1898年にルーマニア北東部の都市ヤシで生まれた。本名をベンジャミン・ヴェクスレーというこの人物は、「ベンジャミン・フンドイヤーヌ」という筆名で、ヤシでの青春期にはすでにルーマニア語で文学活動をはじめていた。1919年にヤシからブカレストに居を移すと、トリスタン・ツァラとともにチューリッヒ・ダダを盛り上げた画家マルセル・ヤンコ、同じくツァラと一緒に『象徴』誌を創刊した詩人イオン・ヴィネア、さらに『75HP』や『インテグラル』などの雑誌でルーマニア・アヴァンギャルドを展開した詩人イラリエ・ヴォロンカと交流するようになる。1923年にはパリに到着し、その後は筆名を「バンジャマン・フォンダーヌ」に変え、フランス語で活動をはじめ。ルーマニア時代からフランス詩に精通し、自らもフランス語で詩を書いていたこの若者には「少なくとも言語に関する大きな問題はなかったのではないだろうか²」と推測されているが、実際は、パリに到着してからフランス語のテクストを発表するまで6年ほどかかっており、多少なりとも異国での生活に慣れるのに苦労したように思われる。その後も、1944年にアウシュヴィッツで殺害されるまでパリで暮らし続けたフォンダーヌが、一種の「異邦人」としての意識に絶え間なく

1 以下に続くフォンダーヌの伝記的事実を振り返る際、次の資料を特に参照した：Olivier Salazar-Ferrer, *Benjamin Fondane*, Paris, Le Félin : collection Les Étrangers de Paris, 2004 ; Benjamin Fondane, *Existential Monday: Philosophical Essays*, edited and translated by Bruce Baugh, New York, New York Review Books, 2016 ; 雑誌『ウーロップ』のフォンダーヌ特集号の論文、対談および年表 (*Europe*, n° 827, Paris, mars 1998) ; 「フランス現代詩研究会」ウェブサイトアップされている年表 (https://poetique.github.io/img/pdf/fondane_resume.pdf, 最終閲覧日 2021年9月15日)。

2 内山憲一「バンジャマン・フォンダーヌの肖像——『ボードレールと深淵の体験』をめぐって」、『仏語仏文学研究』第26号、東京大学仏語仏文学研究会、2002年、166頁。

つきまとわれていた可能性を見過ごすことはできないだろう³。

いずれにせよ、1923年にパリに到着したフォンダーヌにとって、翌1924年に決定的な出会いが訪れる。それは、フォンダーヌの思想に最も影響を与えた哲学者レフ・シェストフとの出会いである。つけ加えておくと、自分は哲学の才に恵まれていないと感じていたフォンダーヌに哲学をすすめたのもシェストフだったと言われている⁴。それまで『インテグラル』などのルーマニアの前衛雑誌への寄稿が主だったフォンダーヌが、フランスの『ウーロップ』誌に「悲劇の哲学者、レフ・シェストフ⁵」という論考を発表するのは1929年のことだ。同年7月には同誌に「エトムント・フッサールと現実というコロンプスの卵⁶」を寄稿した。さらに同年、アルゼンチンの女性作家であるヴィクトリア・オカンポ⁷の招待によってブエノスアイレスへと海を渡った。フォンダーヌはブエノスアイレス大学でルイス・ブニュエルやマン・レイをはじめとするヨーロッパの前衛映画を紹介すると同時に、「レフ・シェストフと明証性に抗する戦い⁸」という題目で講演した。

このようにシェストフとフッサールの論考からフォンダーヌの哲学的キャリアは始まった。30年代に入ると、『カイエ・デュ・シュド』などの雑誌⁹にて、より多くの

3 なおフォンダーヌの「異邦人」の意識については次の論考で触れられている：岩津航「ユリシーズ神話の現代性——バンジャマン・フォンダーヌを中心に」、『文学海を渡る——〈越境と変容〉の新展開』、三弥井書店、2016年、109-155頁；伊藤琢麻「ルーマニア・アヴァンギャルドグループに関する試論——『インテグラル』のメンバーを中心に」、『フランス文学語学研究』、早稲田大学大学院『フランス文学語学研究』刊行会、第36号、2017年、1-12頁。

4 Voir. Arta Lucesco, « Benjamin Fondane et la pensée existentielle », *Rencontre autour de Benjamin Fondane, poète et philosophe : Actes du colloque de Royaumont, 24-25-26 avril 1998*, édité par Monique Jutrin, Sion, Parole et Silence, 2003, p. 73.

5 Benjamin Fondane, « Un philosophe tragique : Léon Chestov », *Europe*, n° 73, Paris, janvier 1929, p. 142-150.

6 Benjamin Fondane, « Edmond Husserl et l'œuf de Colomb du réel », *Europe*, n° 78, Paris, juin 1929, p. 331-344.

7 オカンポとの友情は深く、戦争およびユダヤ人迫害の危機が迫りつつあった1939年2月には、シェストフの原稿と彼との対談の原稿を彼女に託すほどであった。

8 « Léon Chestov et la lutte contre les évidences » と題されたこの講演は、後に、次の雑誌に収録された：Benjamin Fondane, « Léon Chestov et la lutte contre les évidences », *Revue Philosophique de la France et de l'Étranger*, n° 7 et 8, Paris, Puf, juillet-août 1938, p. 13-50.

9 雑誌の創刊者ジャン・バラールを中心とする『カイエ・デュ・シュド』の関係者との手紙のやり取りは、次の本にまとめられている：Benjamin Fondane et *Les Cahiers du Sud*, édition établie et annotée par Monique Jutrin, Gheorghe Has et Ion Pop, Bucarest, Éditions de la foundation culturelle roumaine, 1998.

哲学的論考が発表された。たとえばハイデガー論(1932年)、キルケゴール論(1933年)、バシュラール論¹⁰(1935年)、レヴィ=ブリュール論(1940年)など、アウシュヴィッツで殺害されるまで、フォンダーヌは現代思想に関する多数の論考を残した。これに並行して、アリストテレス、ストア哲学、プラトン、スピノザ、ベルクソン、フロイト、シラー、ヤスパースなど、古今を問わず多くの哲学者の著作を手にとるようになった。

フォンダーヌの哲学は、ときに他の哲学者との討論の間で育まれた。キルケゴールの解釈をめぐるジャン・ヴァールと対立し、40年代に入ると、カミュ『シジフォスの神話』(1942年)やサルトル『存在と無』(1943年)を読み、両者への返答として1944年に「実存の月曜、歴史の日曜¹¹」を書いたと言われている。「歴史が人のためにあるのであって、その反対ではない」というフォンダーヌの主張は、理性の発展を現状克服のプロセスとするヘーゲル的な歴史哲学に抵抗する。なお、このテキストのタイトルは、カフカからの引用とされている¹²。

パリ、ロラン通り6番のフォンダーヌ宅への訪問者の中には、同郷ルーマニアからの来訪者もあり、たとえばシオランや哲学者ステファン・リュパスコがいた。シオランはフォンダーヌに関する短いテキストを残している¹³。リュパスコに関していえば、バサラブ・ニコレスクが取り上げたように¹⁴、フォンダーヌは理性的なものとは非理性的なものの関係性をめぐる思考を彼の思想から練り上げようとしていた。

シュルレアリスムとフォンダーヌの関係についても触れておきたい。『シュルレアリスム宣言』が発表されるのもまた、フォンダーヌがシェストフと出会った1924年だっ

10 40年代前後、バシュラールの要望により、フォンダーヌはソルボンヌ大学で行われていた彼の講義に出ていた。

11 Benjamin Fondane, « Le Lundi existentiel et le Dimanche de l'Histoire », *L'Existence*, Paris, Gallimard, 1945 ; *Le Lundi existentiel et le dimanche de l'histoire* (réédition), Monaco, Éditions du Rocher, 1990. このテキストは、フォンダーヌの死後、カミュ、ジャン・グルニエ、ブリス・パランらも寄稿した雑誌『エグジスタンス』に発表された。

12 « Tu es réservé pour un grand Lundi ! – Bien parlé ! Mais le Dimanche ne finira jamais ». (F. Kafka cité par B. Fondane, « Le Lundi existentiel et le Dimanche de l'Histoire », *Le Lundi existentiel et le dimanche de l'histoire* (réédition), *op.cit.*, p. 11.)

13 E. M. Cioran, « Benjamin Fondane : 6, rue Rollin », *Exercices d'admiration, Œuvres complètes*, Paris, Gallimard : collection Pléiade, p. 1220-1223.

14 Basarab Nicolescu, « Fondane, Lupasco et la multiple splendeur de l'être », *Rencontre autour de Benjamin Fondane, poète et philosophe*, *op.cit.*, p. 49-59. なお、1988年まで生きるリュパスコの著作の内二冊程度しかフォンダーヌは読めなかったため、その考察は当然部分的かつ断片的になっているが、リュパスコをめぐる本としては次のものがある：Benjamin Fondane, *L'Être et la connaissance : Essai sur Lupasco*, Paris, Éditions Paris Méditerranée, 1998.

た。以後、シュルレアリスムがフランスで中心的な運動のひとつになったことは疑いようがない事実である。しかしながら、ダダに少なからずシンパシーを覚えていたフォンダーヌは、この新しい運動には批判的であった。その結果、シュルレアリスムの周縁にいた人物たち、たとえば『大いなる賭』誌のメンバーだったルネ・ドーマルやロジェ・ジルベール＝ルコント、『ディスコンティニューイテ』誌のメンバーだったクロード・セルネらと交流するようになるのは必然的であった。

さらに、戦間期、ヘーゲルとならび多くの作家・詩人を魅了したマルクス主義についていえば、フォンダーヌは一定の距離を保っている。フォンダーヌのマルクス主義に関する考えは「革命を前にした作家¹⁵」などのテキストにあらわれている。彼は、一方でマルクス主義によって示された経済的不平等と貧困を解決すべきとしながらも、他方で経済および社会的な不平等は人間の条件に直面した形而上学的な問題を解決しないと考えていた。そして、作家としてはファシズムないし共産主義どちらになろうと興味ないが、個人としてはファシズムに反対するという態度をとった。

このように、フォンダーヌは20世紀前半の思想の多くと接点を持っていたと言える。そんな彼が、1933年にドゥノエル社から出版された『無頼者ランボー¹⁶』の後、上述した多数の哲学的論考をまとめ『不幸の意識¹⁷』を出版したのは1936年のことだ。ヘーゲル哲学の用語を借用しタイトルとしたこの本は、ジャン・ヴァールの『ヘーゲル哲学における意識の不幸』（1929年）に応答している。それと同時に、30年代末頃から台頭する実存主義的思想（ヴァール、シェストフ、ガブリエル・マルセルなど）に呼応している。加えて、人格主義を打ち立てたエマニュエル・ムーニエやジャック・マリタンなどの著作と関連づけられると言える¹⁸。

この著作では、ある二者間で引き裂かれたものについて語られている。たとえば、理性的な文化が築き上げる現実「le réel」と特異なる実存者「l'existant singulier」、知と「見えぬもの」« non-voir」、それからアテネとイエルサレムといった関係のことだ。そして、フォンダーヌ自身は「不幸の意識」から理性に到達することを目指すヘーゲル哲学に異議を唱えており、個人の意識を保持することを称揚している。また

15 Benjamin Fondane, « L'Écrivain devant la révolution » (1935), *Devant l'histoire*, textes réunis et présentés par Monique Jutrin, Paris, Éditions de l'Éclat, 2018, p. 144-187.

16 Benjamin Fondane, *Rimbaud le voyou*, Paris, Denoël, 1933 ; *Rimbaud le voyou* (réédition), Paris, Non lieu, 2010.

17 Benjamin Fondane, *La Conscience malheureuse*, Paris, Denoël, 1936 ; *La Conscience malheureuse* (réédition), Paris, Verdier, 2013.

18 *Ibid.*, p. 8.

彼は、「不幸の意識」を止揚し現実に到達しようとするヘーゲル哲学的なメカニズムを理性への従属であると考え。どうして不条理の中には、理性的なものの中ほど現実はないのだろうか、と問うのである。それは必然的に明証性との戦いとなる。

このようなヘーゲルとの戦いは、1938年の『偽美学論¹⁹』や1944年の「実存の月曜、歴史の日曜」へと引き継がれる。その『偽美学論』では、実存をめぐる自身の思考を展開しつつ、理性に対抗し、「不条理なもの」« l'absurde » や「非常識なこと」« l'insensé » を実現できるポエジーの重要性が説かれている。なぜそれがフォンダヌにとって重要だったのかは本稿第三節で見てみることにして、まずはフォンダヌの略歴の確認を続けよう。

ルーマニア出身の彫刻家コンスタンティン・ブランクーシ、哲学者・文化人類学者として知られるリュシアン・レヴィ＝ブリュール、カミュらの支援により、1938年にフォンダヌはフランスに帰化した。だがそれは、フォンダヌに確かな安心をもたらすことはなかった。

1942年にパリでユダヤ人大量検挙事件が起きると、ニューヨークあるいはアルゼンチンにフォンダヌを逃がそうと友人たちは奔走した。しかしながら、彼がマルセイユや自由地域へ行くことをフランス政府は認めなかった。1944年に入ると、より多くの人たちが犠牲になった。2月22日には詩人のロベール・デスノスとアンドレ・ヴェルデが捕まり、3月5日には同じく詩人のマックス・ジャコブがドランシー収容所で亡くなった。そして3月7日、フォンダヌと彼の妹はフランス警察に捕まり、その後ドランシー収容所に送られてしまう。ジャン・ポーランは二人が捕まったことをリュパスコとシオランに告げ、彼らとフォンダヌの妻ジュヌヴィエーヴの尽力により、フォンダヌは解放を許された。しかし、妹は収容所を出ていくことが認められなかった。最終的に、フォンダヌは妹と共にいることを選び、アウシュヴィッツにて殺害されたのだった。1941年から執筆をはじめ、『カイエ・デュ・シュド』に断片を発表していた『ボードレールと深淵の体験²⁰』は未完のまま死後出版されることになった。

19 Benjamin Fondane, *Faux traité d'esthétique*, Paris, Denoël, 1938 ; *Faux Traité d'esthétique* (réédition), Paris, Éditions Paris Méditerranée, 1998.

20 Benjamin Fondane, *Baudelaire et l'expérience du gouffre*, Paris, Seghers, 1947 ; *Baudelaire et l'expérience du gouffre* (réédition), Paris, La fabrique éditions, 2021.

2. バンジャマン・フォンダーヌ研究の概観

それでは、詩人であり哲学者でもあるフォンダーヌはどのように研究されてきたのか。すべてを振り返ることはできないが、本研究ノートでは1998年の雑誌『ウーロップ』でのフォンダーヌ特集以後に、どのような動きがあったのかをざっと見返してみたい。

まず、2000年代から2010年代にかけて、フォンダーヌの著作が相次いで再出版されているという事実は注目に値する。たとえば詩集としては、詩人で言語理論家のアンリ・メシヨニックによる序文つきで『亡霊たちの悲痛²¹』（2006年）が、ダダやシュルレアリスム研究の専門家で、フォンダーヌを含むルーマニアの現代文学・芸術に関する多数の著作を発表しているミシェル・カラスの序文つきで『ユリシーズ²²』（2019年）が再出版された。その他、『無頼者ランボー』（2010年）、『不幸の意識』（2013年）、『ボードレールと深淵の体験』（2021年）のような哲学書、『映画のための文書²³』（2007年）のような芸術書も再出版された。フォンダーヌの作品を集めたアンソロジーも複数出版されており、モニック・ジュトランがテキストを編纂した『バンジャマン・フォンダーヌ 哲学と文学の間で²⁴』（2015年）や『歴史を前にして²⁵』（2018年）、ブルース・バウが編纂と翻訳をした英語版アンソロジー『実存の月曜 哲学的エッセー集²⁶』などが例として挙げられる。2004年には、オリヴィエ・サラザール＝フェレによる伝記も出版された²⁷。書物から離れてみると、2009年10月14日から2010年1月31日にかけて、パリのショア記念館でフォンダーヌに関するエキスポジションも実施された。これら一連の出来事は、フォンダーヌ研究の盛り上がりを証明しているのではないだろうか。

言うまでもなく、こうしたフォンダーヌ研究の隆盛は、「バンジャマン・フォンダーヌ研究会」（Société d'études Benjamin Fondane）に代表される研究組織と、数々の研究者たちによる精力的な活動に多くを負っている。この短い研究ノートですべてを挙げることはできないが、たとえば、モニック・ジュトランを中心に実現したフォ

21 Benjamin Fondane, *Le Mal des fantômes*, Paris, Verdier, 2006.

22 Benjamin Fondane, *Ulysse*, Paris, Non lieu, 2019.

23 Benjamin Fondane, *Écrits pour le cinéma : Le muet et le parlant*, Paris, Verdier, 2007.

24 Benjamin Fondane, *Benjamin Fondane entre philosophie et littérature*, textes réunis par Monique Jutrin, Sion, Parole et silence, 2015.

25 Benjamin Fondane, *Devant l'histoire*, op.cit.

26 Benjamin Fondane, *Existential Monday: Philosophical Essays*, op.cit.

27 Olivier Salazar-Ferrer, *Benjamin Fondane*, op.cit.

ンダーヌ生誕百周年記念コロックの論集²⁸、フォンダーヌの詩学を掘り下げたパトリス・ベレーによる研究²⁹、フランスでのヘーゲル受容の歴史を詳しくたどったブルース・バウの研究³⁰、実存主義の哲学や文学を専門とするオリヴィエ・サラザール＝フェレによる研究³¹、哲学研究者でありながら物理学者でもあるマイケル・フィンケンタールによる研究³²などが挙げられる。それから、映画・映像に関わる研究として、シェストフをはじめとするフランス現代思想の専門家ラモナ・フォティアードによる研究³³や、クリストフ・ウォール・ロマーナによる研究³⁴などが挙げられる。こうしていくつか並べてみるだけでも、哲学、文学、映画といったように、フォンダーヌ研究が非常に多角的に行われていることがわかるだろう。隣接する領域を横断するようなテーマが掲げられることもあり、たとえば哲学と詩の関係性を問うアンヌ・ムーニックの研究³⁵では、フォンダーヌとシェストフに一章が捧げられているし、プリミティヴ・アートの紹介者としても知られる美術史家カール・アインシュタインとの関係を扱った論集もある³⁶。研究書に加えて、フォンダーヌに関する論文を数えだすと、それこそきりがなくなる。

それでは、フォンダーヌは日本でどのように紹介されてきたのだろうか。フォンダーヌの名前が日本の文芸誌に登場するのは意外にも早く、たとえば、春山行夫、北川冬彦、竹中郁、上田敏雄らによって1928年に創刊された雑誌『詩と詩論』の第二号には、「フォンダヌのシネ・ポエム——3シェナリイを読む」と題された飯島正の評がある³⁷。「シネ・ポエム」とは映画の台頭によってあらわれた新しい詩のかたちで、シナリオ形式

28 *Rencontre autour de Benjamin Fondane, poète et philosophe : Actes du colloque de Royaumont, 24-25-26 avril 1998, op.cit.*

29 Patrice Beray, *Benjamin Fondane, au temps du poème*, Paris, Verdier, 2006.

30 Bruce Baugh, *French Hegel: From surrealism to Postmodernism*, London, Routledge, 2003.

31 Olivier Salazar-Ferrer, *Benjamin Fondane et la révolte existentielle*, Paris, Editions de Corlevour, 2007.

32 Michael Finkenthal, *Benjamin Fondane : A Poet-Philosopher Caught Between the Sunday of History and the Existential Monday*, Bern, Peter Lang, 2012.

33 Ramona Fotiade, « Benjamin Fondane et le cinéma expérimental: image de la pensée » in *Caietele Avangardei*, 4(8), Bucarest, Editura MLR, p. 102-107.

34 Christophe Wall-Romana, *Cinemoetry: Imaginary Cinemas in French Poetry*, New York, Fordham University Press, 2013.

35 Anne Mounic, *Poésie et philosophie : Ineffable rigueur*, Boston, Brill Rodopi, 2017.

36 *Carl Einstein et Benjamin Fondane. Avant-gardes et émigration dans le Paris des années 1920-1930*, sous la direction de Liliane Meffre et Olivier Salazar-Ferrer, Bern, Peter Lang, 2008.

37 飯島正「フォンダヌのシネ・ポエム——3シェナリイを読む」、『詩と詩論』第二冊、1928(昭和3)年12月、205-208頁。

をとり、各詩句の頭に数字が振られるという特徴を持つ。ブリュッセルで編纂されたはじめてのフランス語著作『三つのシナリオ：シネ・ポエム』をフォンダーヌが上梓したのが1928年であるため、飯島の評は非常に早い日本へのフォンダーヌ紹介だったと言える。その中で飯島は『三つのシナリオ：シネ・ポエム』の序論「2×2」を評価しつつも、シネ・ポエムの作品自体は批判している。また、この批評はあくまで「シネ・ポエム」について語るもので、フォンダーヌという人物の紹介とまでは至らなかった。そして、その後70年間ほど、日本でフォンダーヌの詩や哲学が日の目を見ることはなかった。

フォンダーヌが伝記的事実とともに詳しく取り上げられるのは、2002年の内山憲一の論文「バンジャマン・フォンダーヌの肖像——『ボードレールと深淵の体験』をめぐる³⁸」においてである。この論文ではルーマニア時代の「フンドイヤヌ」とフランス時代の「フォンダーヌ」という二つの時代を横切り、フォンダーヌの文学活動が紹介されている。その十年ほど後、岩津航の論文「二人称のユリシーズ——バンジャマン・フォンダーヌの『ユリシーズ』について³⁹」や「ユリシーズ神話の現代性——バンジャマン・フォンダーヌを中心に⁴⁰」において、フォンダーヌとは誰か、日本語読者に紹介されている。特に、神話と関連づけながら詩作品『ユリシーズ』を分析するために、フォンダーヌをとりまく文学事情が詳しく解説されている。

このように飯島によるシネ・ポエム評、内山と岩津による伝記的事実の紹介により、詩人・文学批評家としてのフォンダーヌの顔は日本語でもある程度見ることのできる状況にある。一方で、本研究ノートの冒頭で確認した哲学者としてのフォンダーヌはあまり知られてこなかったと言える。今後、日本でフォンダーヌ研究がよりいっそう盛り上げられるためには、詩人として、哲学者としてというフォンダーヌの二つの顔が明るみに出ていくことが肝要だろう。

3. ポエジーは現実はどう関われるのか——『偽美学論』を読む

フォンダーヌの思想のひとつに、現実とポエジーの関係性というテーマがある。本稿では試みとして、哲学と詩の二つの領域に関わるこのテーマについて、1938年に

38 内山憲一「バンジャマン・フォンダーヌの肖像——『ボードレールと深淵の体験』をめぐる」、前掲論文。

39 岩津航「二人称のユリシーズ——バンジャマン・フォンダーヌの『ユリシーズ』について」、『言語文化論叢』第15号、金沢大学外国語教育研究センター、2011年、93-110頁。

40 岩津航「ユリシーズ神話の現代性——バンジャマン・フォンダーヌを中心に」、前掲論文。

出版された『偽美学論』での議論を中心に考えたい。本書の題に「偽」« faux » とつけられている理由は、「偽なるものは、真実なるものよりも、存在論的に豊潤で実存に関わるのである⁴¹⁾」とフォンダーヌが考えていたからだ。

本書の中で、ポエジーが倫理または哲学に従属させられていると述べつつ、フォンダーヌはその原因を理性への偏向によるものとした。ロジェ・カイヨワ、アンドレ・ブルトン、そしてヘーゲルといった多数の哲学者や詩人の名前が登場する本書の議論は、プラトンが『国家』の中に記した「詩人追放論」からはじまる。なかでもフォンダーヌが目にしたのは、詩人から生まれる神々が姦淫したり、酒を飲んだり、悪巧みしたりするような物語は知らせないほうが良いので、ホメロスははじめ、多くの詩人をポリスから追い払わなければならないという箇所である。これを言い換えると、このような物語を作り出す詩人は、真実に関する三つの段階（神が生むアイデア、職人がつくる作品、画家が描くイメージ）から離れているために退けられねばならないということになる。ホメロス以来、詩人は巧みに嘘を吐く術を教えられてきたのであり、真実から程遠い詩人は、共和国から排斥されてしかるべきであると考えられてきたのだった。

このような「詩人追放論」によって、真実は、ただ「(知性によって)理解できるもの」« l'intelligible »へと還元されてしまうとフォンダーヌは言う⁴²⁾。そして『不幸の意識』で述べたのと同じく、物事の明証性や構造、つまり理性に重きが置かれるのは、ヘーゲル主義的な観念論に端を発するのだと彼は考える。30年代というフォンダーヌが生きていた時代の理性主義は行き過ぎており、しかもそれは何も発明しなかったと彼は書いている⁴³⁾。さらに、このような理性主義的な国家のあり方が第三ライヒ(第三帝国)やスターリン政権下のソ連と類似しているとまで述べている⁴⁴⁾。フォンダーヌによれば、ファシズムに代表される社会的な危機は、過度な理性主義に由来するのである。これに対して、いかなる「国家」にも入国できない詩人は、「思弁的な建設が短い時間しか存続しないこと、つまり『非常識な』生活がそれに打ち勝つことを知っている⁴⁵⁾」存在であるとみなされ、その存在に一定の重要性が与えられている。

41 « [...] le 'faux' est ontologiquement plus riche, plus existentiel, que le vrai ». (Benjamin Fondane, *Faux traité d'esthétique* (réédition), *op.cit.*, p. 64.) この点に関しては、次の論文で分析されている: Baldine Saint Girons, « Pourquoi un Faux traité d'esthétique? », *L'Amitié guérinienne*, Paris, Classiques Garnier, 2017, p. 99-113.

42 Benjamin Fondane, *Faux traité d'esthétique* (réédition), *op.cit.*, p. 51.

43 *Ibid.*, p. 52.

44 *Ibid.*, p. 53.

45 « Mais il sait aussi que les constructions spéculatives sont de courte durée ; que la vie

プラトンの「詩人追放論」と、ヘーゲルの「理性主義」は基本的に同じだとフォンダーヌは考える。『偽美学論』では、ヘーゲルの狙いが「有限性や個別性の否定、および精神に限界を課すあらゆるものの拒絶」だと紹介されている⁴⁶。このようなヘーゲルの理論に即して、ヴァレリーのよう、偶然や限界のあるものを排斥した知性のドラマを歌い上げるポエジーの役割が確立されたのだと彼は考える⁴⁷。さらに、プラトンの名前を挙げ彼が、一方でプラトンの考えを否定し、他方でヘーゲル哲学に立脚して理論を展開していると批判する⁴⁸。「毒人参の盃をプラトンから渡されるのを拒否した詩人は、同じものをヘーゲルの手から受け取り誇りに感じている⁴⁹」だけで、本質的には何も変わっておらず、プラトン以来のイデア論の罠に陥っている、というわけである。ヴァレリーもシュルレアリストも、理性の力を借りて詩の中にふくまれる非理性を捉えようとしているとフォンダーヌはみなし、その矛盾をつく⁵⁰。その意味で、両者の親近性は否めず、シュルレアリスムの純粹芸術、純粹詩の志向をフォンダーヌは嘆くのである⁵¹。

このように、詩人たちが哲学へと歩み寄り、理性的なものとは非理性的なものという相容れない二つのものが混じり合ってしまった。ポエジーが哲学あるいは理性に従属するようになった原因のひとつは、ロマン主義（とりわけドイツ・ロマン主義）にあるとフォンダーヌは述べる。なぜなら「ロマン主義が助けを求めた先は、またしても、新たなデカルト主義から生まれた、バークリー、カント、フィヒテ、そしてヘーゲルといった観念論の哲学だった⁵²」からだ。その他、ロマン主義は神智学、メスメリズム、科学などにも負うところが多く、理性的かつ知性的な世界観を現実に課したのだ

‘insensée’ y reprend vite le dessus ». (*Ibid.*, p. 53.)

46 « On voit, éclairci par l'exemple, ce que Hegel entendait par 'l'absolue négation de tout ce qui est fini et particulier', par l'action de repousser 'tout ce qui impose des limites à l'esprit' ». (*Ibid.*, p. 59.)

47 *Ibid.*, p. 60. ヴァレリーの詩作に対しては次の論考でも異を唱えている： Benjamin Fondane, « Poésie pure de Paul Valéry à Tristan Tzara », *Unu*, Bucarest, 1930, p. 5-6.

48 *Ibid.*, p. 57.

49 « La coupe de ciguë que le poète refusait de Platon, il est fier de la recevoir à présent des mains de Hegel ». (*Ibid.* p. 60.)

50 *Ibid.*, p. 68.

51 *Ibid.*, p. 69.

52 « C'est à la philosophie encore que le romantique alla demander secours, à la philosophie issue d'un second cartésianisme, idéaliste cette fois-ci, berkeleyen, kantien, fichtéen et hégélien ». (*Ibid.*, p. 63.)

とフォンダーヌは言う⁵³。その結果、ポエジーは実存的な総体から切り離されてしまったのだった⁵⁴。

それでは、どうすればプラトン＝ヘーゲル的な理性主義に詩人は対抗できるのだろうか。そもそも、フォンダーヌによれば、プラトンからの攻撃に「道理の通った」« *sensé* » 論拠を対立させるのは無意味である。なぜなら詩人とは、からかうことしかできないからだ⁵⁵。言い換えれば、詩人ができるのはせいぜい「非常識なこと」« *l'insensé* » くらいなのである。ところで、そのようなポエジーの「不条理なもの」« *l'absurde* » や「非常識なこと」« *l'insensé* »こそ、プラトンが『国家』の中で消そうと努めたものだった。詩人は神や偉大な人々に嘆きや後悔を吐露させてはならなかったが、それらを褒め称えることは許されていた。つまり有意義な目的を持つ「嘘」だけは容認されていたのだ。反面、生命や死や苦痛といった、たしかに存在するが不可知なものに長くこだわることは非難の対象になっていたとフォンダーヌは考えた⁵⁶。彼によればこの不可知なものこそがポエジーの肝なのだが、これは、プラトン、ヘーゲル、そしてフォンダーヌと同時代の詩人たちによって捨て去られる傾向にあった。その結果、詩人は空想的で、現実を叙述することができぬかのようにみなされた。

フォンダーヌは、不可知なものを追い求めるポエジーが現実と関わるための議論を構築しようとした。そこで、その議論の擁護のために持ち出されたのが、レヴィ＝ブリュールの議論である。それによると、プリミティヴな社会では「非存在」« *non être* » なるものを見つけるのは不可能であり、すべてが存在で、すべてが現実で、真実だと考えられる⁵⁷。したがって、レヴィ＝ブリュールは、プリミティヴな想像力ではなく、その現実的な感覚を報告しているのだとフォンダーヌは考える⁵⁸。しかし、理性的思考が推し進められた現代では、あらゆるすばらしい作品が「非存在」« *non être* » から生まれてきたのだとみなされ⁵⁹、そこから実存的、すなわち人間的なものは排除されてしまう。こうして、美学の潮流はプリミティヴな現実から現代的な非現実へと移行したとフォンダーヌは考える⁶⁰。詩人が予感するのは、この非現実の中にはのめかされた現実の可能性、もっと言えば、風景の中のニンフや、感情を託された花

53 *Ibid.*, p. 64.

54 *Ibid.*, p. 64.

55 *Ibid.*, p. 55.

56 *Ibid.*, p. 78.

57 *Ibid.*, p. 94-95.

58 *Ibid.*, p. 94-95.

59 *Ibid.*, p. 97.

60 *Ibid.*, p. 97.

や星を現実であると素朴にも信じることによってたちあらわれる「恥ずべき現実」なのである⁶¹。

しかしながら、プリミティヴな回路を通してあらわれる詩的な「恥ずべき現実」は、30年代当時の人々にとって拒否の対象でしかなかった。結果として、義務と必然性に支配された社会が誕生したのだ。30年代のような一種の脅威に晒された社会では、「有益な解決策」を見つけ出すことに全てが向けられ、この解決策を獲得するためにすべてが組織され、教育されることになった。つまり、時間を失うことより不道徳的なものなどなく、人間のあらゆるエネルギーは何らかの収益や効率を見込まれることになったのだ⁶²。

これと同じような問題は、プラトンの時代のアテネの民主主義でも提起されていた。すでに見たようにプラトンの考えでは詩人は追放の対象に過ぎず、彼らを使うあるいは何らかの「専門家」に転向させるという発想はなかった⁶³。直感的に、詩人が有用になることなどありえないとわかっていたからだ。プラトンと同じように、「精神」«L'Esprit»も考える。それは、無償の行為のために無駄遣いする時間を保ち合わせておらず、ただ「義務」だけを持つ⁶⁴。そのような「精神」が嫌悪感を覚えるのは、自由な状態の生、何らかの目的に秩序づけられていない生、侮辱され、服従されていないものだとフォンダーヌは言う⁶⁵。危機的状況のヨーロッパで秩序を立て直すために息を吹き返すのが、この「精神」で、有用性という言葉に重きが置かれるのである。フォンダーヌの考えでは、その結果、ポエジーは死ぬ。

すると、どうなるか。人間の惨めさのヴィジョン——日々の糧や、日課や、仕事や、戦いや、人間そのもの——を詩人が歌い、考えるのが無駄になる。むしろ人は、そういうことに恥じらいを覚え顔が真っ赤になり、髪をかきむしる。それでも詩人は、ランボーが「私とは一人の他者なのだ」といったように、「他者」に取り憑かれているため歌い続けることしかできない。けだし、歌うのはこの「他者」なのである⁶⁶。詩人が使う一人称単数形の「私」«je»が「精神」の言うことに賛同しても、その内側には、不服従な「他者」がいる⁶⁷。さもなければ、詩人ではないのだ。

61 *Ibid.*, p. 97-98.

62 *Ibid.*, p. 122.

63 *Ibid.*, p. 123.

64 *Ibid.*, p. 124.

65 *Ibid.*, p. 124.

66 *Ibid.*, p. 127.

67 *Ibid.*, p. 132-133.

自己であり「他者」であるという二重性を帯びた人称で歌う詩人は、己の「恥ずべき現実」を肯定する。フォンダーヌが言うように、たとえポエジーが世界の中の真実に最も不適合なもののすべてであり⁶⁸、それが「体系的に誤った経験のひとつ」« *une expérience systématiquement fausse* »なのだとしても。ランボーは、ポエジーが到達するのは、もはやポエジーが不可能になるだけの「ざらざらした現実」« *réel rugueux à étreindre* »だと知り、詩的探究に「別れ」を告げた⁶⁹。これに対してフォンダーヌは、そのような現実、言語では表出不可能だとみなされてきた現実にもポエジーはたどり着けるのだと素朴に信じていると言えるだろう。

ところで、どうしてフォンダーヌはポエジーが現実と関わることができるのだと主張したかったのだろうか。この問いにすぐさま答えを与えることはできない。だがこの点に関して、「革命を前にした作家」というテキストの一節は示唆に富むように思われる。これは、1935年6月に「革命的作家芸術家協会」(Association des écrivains et des artistes révolutionnaires)によってパリで催された「第一回文化擁護のための国際作家会議」の感想が記されたテキストである。そこでフォンダーヌは次のように述べている。

Non, l'écrivain n'est pas un homme d'action ; je veux dire un homme qui agit *directement* sur le social, qui agit directement sur les passions de surface ; son activité est à longue échéance, elle est médiante, elle s'adresse non au social mais à l'individu, et l'individu, non de passion de surface à passion de surface, mais de région profonde à région profonde⁷⁰.

否、作家とは行動する人ではない。私が言いたいのは、社会なるものに直接的に影響を与えたり、直接的にうわべだけの熱情に訴えかけたりする人ではない、ということだ。作家の活動は長い目で見られるもので、それは間接的で、社会ではなく個人に語りかける。その個人の、うわべだけの熱情ではなく、もっと深いところへと語りかけるのである。

このような態度は、共産党支持をはっきりと表明する詩をつくり、国民の連帯を実現するための脚韻論を発表したルイ・アラゴンや、明瞭な散文が作家の政治参加のために求められると考えアンガージュマンの理論を提唱したサルトルとは程遠いように

68 *Ibid.*, p. 128.

69 *Ibid.*, p. 137.

70 Benjamin Fondane, « L'Écrivain devant la révolution », *Devant l'histoire*, *op.cit.*, p. 162.

思われる。社会的、現実的だと普段私たちがみなすのと異なる仕方で、作家は社会や現実に関わることができるということをフォンダーヌは提案したかったのではないだろうか。だから、現実「間接的に」関わりうるポエジーを彼は構想しようとしたのではないだろうか。そのようなポエジーのあり方は、本稿でできなかった彼の実践の分析、つまり詩作品の分析を通ずることなしには見えてこないだろう。

4. まとめ

本稿ではバンジャマン・フォンダーヌの伝記的事実を、とりわけ彼の哲学に関わる出来事を中心にまとめ、近年のフォンダーヌ研究および日本語でのフォンダーヌ紹介について整理した。そして、ポエジーが現実に関わることが可能かという問いのもと、彼の思想の一端を考えてみた。理性的なるものによって追いやられてしまったポエジーをもう一度舞台へと上げるために、フォンダーヌは徹底して実存と向き合う。本稿第三節で確認したように、作家は社会ではなく個人へと、しかもそのうわべだけの熱情ではなくもっと深いところへと語りかけるとフォンダーヌは書いた。あらゆるものが接続し集団化する私たちの時代でもまた、個人と向き合うためのポエジーという方法は一定の価値を持ちうるのではないだろうか。

他方、本稿でやり残したこともたくさんある。第三節の最後にも書いたように、フォンダーヌの詩作品の分析が次なる課題であることは明白である。また、フォンダーヌの思想紹介としては『偽美学論』という一冊の書物の、しかもその大筋を駆け足で確認したに過ぎず、細かい論理展開を追うことや、シュストフやフッサールをはじめとするフォンダーヌの議論の前提となる哲学者の考え、ブルトンに代表されるシュルレアリストおよびその他の同時代作家（たとえばジョルジュ・バタイユ）の考えを踏まえて分析することはできなかった。また、フォンダーヌの議論にしばしば登場する旧約聖書からの引用（たとえば『創世記』に登場する知恵の樹・生命の樹）についても触れられなかった。このように、まだまだ知るべきことがあまりにも多いこの哲学者兼詩人について、稿を改め再び語らねばならないだろう。